

古代出雲国の女性名について

田 籠 博

はじめに

『出雲国風土記』を講読する機会が二年にわたってあり、色々学ぶ所があった。一つは河川記事における斐伊川の特殊な扱いに気づき、それについては既に私見を述べた。本稿では、風土記に見えない古代の出雲国の女性名について述べてみたい。

風土記の意宇郡安来郷条に女子がワニに襲われる逸話がある。父の名が「猪麻呂」、其子が「与」とあるのだが、当の被害者である女子の名はどこにも現れない。意宇郡の寺院の条に造立者「目烈・猪麻呂・弟山・根猪」などが載るのと対蹠的である。

だとすれば、風土記の成立年代に近い史料があり、それに載る出雲国の女性名を読んでみることに一定の意味があることになろう。

本稿で扱う「出雲国大税賑給歴名帳」は、天平11年(739)に編まれた人名帳で、出雲郡・神門郡の一部ではあるが、出雲国内の男女の高齢者、独身者(鰥・寡)、障碍者、15才以下の孤児に救援の穀類を給付した記録である。「正倉院文書」の正集巻31~33、塵芥巻1に載り、『大日本古文書 編年文書』等に翻字、『正倉院古文書影印集成』(八木書店)に影印がある。近時刊行された『松江市史 資料編3 古代・中世I』(2013)にも収められている。

本史料の語学的な検討は、桑原祐子氏『正倉院文書の国語学的研究』(思文閣出版2005)で女性名末尾の「売・女」表記が、鈴木喬氏の「書記者の位相」(「愛知県立大学説林」62、2013)で用字が論じられている。ただし、いずれも人名自体について触れる所はほとんどない。

本史料に記載された女性名(450名)について、固有名詞という限定された領域ではあるが、試論として提示する。

1. 女性名一覧

以下に筆者が試みた読みに従って五十音順に名を掲げ、類例を他国の戸籍類から引くなど必要な注記を施す(「国」は省記する)。関連する出雲国の男性名を努めて挙

げ、必要な場合には他国の例を示す。

表記は原文に従い、名の末尾に「売・女」両表記があるときは「売」に統一した。振り仮名は片仮名で施し、上代特殊仮名遣いに関わる仮名は乙類を平仮名とした。名の右に付した数字は用例数である。

【ア】

^{アカ}赤売 4 各国に多数の例があり、御野（美濃）に「^{アカ}阿加売」。男性名に「赤人・赤麻呂」。

^{アカキ}赤井 名末尾の「売・女」を脱する。男性名に「赤井」。

^{アグリ}餘売 3 御野に同名および「余売」。仮名表記はなく確実ではないが、習慣的な読みを採って「アグリ」と読む。男性名に「餘」。

^{アコ}阿古女 御野に同名、下総に「^{アコ}阿古売」。遠江の男性名に「^{アコ}阿古麻呂」。

^{アサ}皆売 同名が下総・山背（山城）にある。『観智院本類聚名義抄』に「アサケル」（仏中33）の訓があることにより「アザ」と読む。御野に「^{アサ}阿佐売」。男性名に「皆男」。計帳類で個人を識別する特徴「黒子」と並んで「右手皆」などと記す。

^{アツ}阿豆売 御野に「^{アツ}安都売」。他国の男性名に「^{アツ}安津・^{アツ}安都・^{アツ}安豆」。

^{アヤ}文女 「文」は「アヤ」とも「フミ」とも読めるが、御野の「^{アヤ}阿屋売・^{アヤ}阿夜売」、下総の「^{アヤ}阿耶売」があるのに対して「フミ」の確実な例はない。男性名に「文虫」。他国に「^{アヤ}阿屋麻呂・^{アヤ}綾麻呂」。

^{アユ}阿由女 山背・下総・御野に同名「^{アユ}阿由売」。

^{アラ}荒売 御野に同名がある。男性名に「^{アラ}荒石・^{アラ}荒海」。

^{アリ}在身売 「アルみ」か。男性名に「^{アリ}在井・^{アリ}在間・^{アリ}有間」。

【イ】

^{イキ}伊积売・^{イキ}生売 4 山背に「^{イキ}伊岐売」がある。

^{イサ}伊佐売 2 同名が山背・筑前・豊前にある。

^{イシ}石女 2 「石」は「イシ」とも「イハ」とも訓じる。山背・筑前・豊前に「^{イシ}伊志売」、御野に「^{イハ}伊波売」。今多数に従う。男性名に「石麻呂」。

^{イタベ}板部売 「部」字を含む名は御野に「^{イタベ}勝部売・^{イタベ}部屋売・^{イタベ}三部売」があるものの、珍しい例である。御野の「^{イタベ}伊多売」「^{イタベ}伊太弥売」など関係のある名か。男性名に「板日」。

^{イチキ}伊知伎女

^{イチヌシ}市主売 男性名に「^{イチヌシ}市麻呂・^{イチヌシ}市嶋」。

伊奈売・稲女 ^{イナ}5 「稲売」は各国に例がある。御野に「伊尼売」があるから「イナ」と確定できないが、今は「伊奈売」と同名と見ておく。

稲足女 ^{イナタリ} 男性名に「稲足」。御野・山背にもある。

稲村女 ^{イナムラ} 「村」が「寸」と通用するとすれば、御野の「稲寸売」と同じく「イナキ」とも読める。男性名に「稲村」。

伊奴売・犬売 ^{イヌ} 御野に同名および「伊怒売」、下総に「伊努売」。男性名にも「犬・犬麻呂」。十二支による名である。

石津売 ^{イハツ}2 「石女」条を参照。筑前の「伊波豆売」に従う。

飯売 ^{イヒ}2 同名が各国にあり、御野に「伊比売」。他国の男性名に「飯麻呂」。

飯足女 ^{イヒタリ} 御野に同名。同国に「多利売・多理売」、出雲に「麻加太利売」がある。

飯津売 ^{イヒツ}4 豊前に「伊比豆売」。

飯主女 ^{イヒヌシ} 下総・山背に「飯主売」。

飯依売 ^{イヒより} 「依」字はア行エの音仮名としても用いられるが、「よる・より」と訓読することも考えられる（「よ」は乙類）。女性名では単独で用いられた「依売」が出雲を始め下総・御野・山背の各国にあるほか、「稲依売・五百依売・加依売・国依売・枯依売・高依売・玉依売・千依売・得依売・真依売・身依売・牟依売・小依売」などにも見え、初字ではなく二字めに用いられる。出雲や下総・筑前・豊前に「与理売・与利売」があることを根拠に「依売」と読み、他も一律に「より」と読む。

五百依女 ^{イホより} 女性名で「五百」を含む名は「五百寸・五百倉・五百椋・五百嶋・五百足・五百目・五百利・五百依」などがあり、他国の男性名に「五百依」がある所から、多数を表す好字として選ばれたと思われる。出雲の男性名に「五百嶋・五百足」。

今女 ^{イマ} 「今」字を含む名は男女とも類例がない。下総「伊麻古売」、御野「伊麻佐売」と関係があるか。

伊毛売 ^{イモ}7・**妹売** ^{イモ}4 同名は各国にあり、豊前に「伊母売」がある。他国に多い「阿尼売・姉売」の対になる名と思われる。

妹足売 ^{イモタリ}

伊也女 ^{イヤ}

【ウ】

牛売 ^{ウシ}11 同名は各国に多く、御野に「宇志売」。男性名に「宇志・牛麻呂」。これも十二支による名である。

宇弓売 ウデ 同名が筑前に、同国に「宇代売」、豊前に「宇提売」。男性名に「宇弓」。
宇奈売 ウナ 御野に「汗奈売」。男性名に「宇奈麻呂」がある。これも十二支による名。

馬売 ウマ 8 単独の女性名は類例がない。これも十二支による名である。男性名に「馬手・馬依・馬足・馬代・馬養」。

馬津売 ウマツ 5 筑前に同名、御野に「馬都売」。

馬身女 ウマミ 豊後に「馬身売」。男性名に「馬身」。

宇良売・浦売 ウラ 御野の「占売」も同じか。

浦身売 ウラミ 「身」はミ乙類の仮名である。『万葉集』に現れる「浦廻」等が「浦見」ではなく、「めぐる」意の「みる」であることは、有坂秀世氏が「古動詞「みる」(廻・転)について」(『国語音韻史の研究 増補版』所収)で明らかにした。

【エ】

山背の「愛売」、豊前の「獲売」を「エ」と読むとすれば例となる。出雲の「得売」も「エ」と読む可能性がある。ただ、「得自売・得尔売」があることから、本史料では「トコ」の二合仮名とした。

【オ】

忍売 オス 4 同名は御野にあり、出雲・御野の男性名に「忍麻呂」がある。「忍」が「オシ・オス」のいずれかは確定的でない。御野に「意司売」、御野・山背・豊前の三国に「意須売」。男性名に「忍麻呂」。

忍足売 オスタリ 御野に「意志比止・忍人」があることからすると「オシタリ」の可能性もある。男性名に「忍足」。

弟女 オト 御野・山背に「意止売」、山背に「意等売」。「妹売」と同様に「姉売」の対となる名である。男性名に「弟麻呂・乙麻呂」。

弟姉女 オトアネ 他国の戸籍等によると、「姉売」より年少の場合にこの名がある。奈良に「乙姉売」ともある。

乙刀自売 オトジ 「弟刀自売」の意であろう。

弟成売 オトナリ

弟益女 オトマス

大売 オホ 2 各国に同名がある。「小売」に対する名である。男性名に「大麻呂」。「邑麻呂・邑登・邑止」の「邑」も「オホ」と読むか。

大嶋女 オホシマ 男性名「大嶋」が御野・山背にある。

大羽売 オホハ 同名が山背。

老売 3 山背・筑前に「意由売」。男性名に「意由」、各国に「老」がある。長寿を願う名であろう。

【カ】

香売 「香」は「カ」とも読むが、「カ売」の名は類例がないから、今は二合仮名としておく。次条と同名だとすれば「カゴ」と読むべきか。

加胡女 前条「香売」と同名か。

加佐売 3 山背の「笠売」と同名か。

香世売 2 機織りに関わる「栴・綯」などによる名か。

形名売 御野に「加多奈売・加田奈売」。男性名に「方麻呂」。

形見女・方見売 3 御野に「加多弥女」。

勝売 2 「カチ」とも読むか。男性名に「勝来」。

加和売 「カワ」という音結合は類例がない。「カハ（川）」のハ行転呼音か。男性名に「川村・河内」。

【キ】

枳止売

衣売 2 御野に「伎怒売・支奴売」。

【ク】

櫛手売

櫛名売 他国には例がない。八岐大蛇退治の出雲神話に現れる「櫛名田姫」を想起させる。「だ」を「くだもの（木の物=果物）・けだもの（毛の物=獣）」と同じく連体格助詞と解すれば「櫛名の姫」であり、実在した名に基づくか。

薬売 2 御野と豊前に「久須利売」。呪術的な名であろう。

組手売

黒売 2 同名は各国にある。男性名に「黒・黒麻呂・黒猪・黒足・黒井・黒人・黒当」。

【ケ】

気津売 同名が備中に、筑前に「気豆売」。この音で始まる名は、現代でも「ケイ子（恵子など）」以外は稀である。

【コ】

古女・故売・子売 御野に「古売」、下総に「子売」。「子」は年少者を表すが、派生的な意味あいであり、単に小さいことを意味する「小」とは異なっ

いたと筆者は考えている。男性名に「古麻呂」。

子津女 御野「古津売」、下総「古都売」、筑前「古豆売」。

子友売 「友売・伴売」の対になる名である。

子日女 同じく「比売・日売」の対になる名で、下総に「古比売」がある。

木間売 「木」はコ乙類であるから、御野や豊前に見える「古麻売」(駒売)とは別である。「高麗・狛」の意か。

木見女 「キミ」と読むべきか。男性名に「枳美」。

枯依女 下総に「古与理売」がある。「依売」に対する「子依売」の意か。

【サ】

坂売 2 下総に「佐加売」。不詳国の「酒売」の意らしく、山背の「逆売」、奈良の「逆女」も同名か。他国の男性名に「佐加麻呂・坂麻呂・酒麻呂」。

酒足女 山背に「酒足売」がある。

酒津売 2 同名が御野に、また同国には「酒都売」ともある。

酒見売 備中に同名がある。

佐流売 5・**猴売** 3 下総に「佐留売」。「猴売」は筑前にある。十二支による名である。男性名に「佐流・猴・猴毛」。

【シ】

志去売 シコは「醜」の意か。記紀が伝える大国主神の別名は「葦原色許男神」「葦原醜男」で、好んで醜悪な名を付けたという。男性名では、遠江・豊前に「色乎」、筑前に「色夫」が見える。これも呪術的な名であろう。

舌荒売 「シタラ」と読むべきか。

志津女 御野に「志都売・志豆売」。

漆美売 御野に「志津弥売」。

志波売

椎女 「椎」字を含む人名は類例がない。

椎津女 2

嶋売 3 同名は各国に多く、御野に「志麻売」。

嶋足女 御野に「嶋足売」。筑前の「嶋垂売」も同名か。男性名に「嶋足」。

嶋身売 「身」については「浦身売」の項を参照。御野の「嶋弥売」の「弥」は甲類の仮名で別名になるが、戸籍類における上代特殊仮名遣いの有無については諸説ある。男性名に「嶋身」。

【ス】

須臬礼女 『万葉集』1738の腰細の昆虫スガルを美人に喩えた「腰細の須輕^{スガル}娘子」を想起させる名。訛形か。

宿太売 5 「宿」字の読みは「ス・スク・スコ」などの可能性があり確定できない。豊前の「須古多売・須古太売」と同名だとすれば「スコ」、筑前の「宿古大売・宿古太売」に倣えば「ス」となる。近江に見える「宿奈尼売」を何と読むのか。「宿奈売」などと併せて考えるべきだが、ここでは無難な「スク」の読みとし、他例は訛形と考えておく。男性名に「宿太」。

宿提売 前条を参照。豊前に「須古提売」。

【セ】

他国を含め女性名の例はない。男性名も「世麻呂」、他国の「勢麻呂・世^セ尔得」などしかない。

【ソ】

蕪提売・袖売 豊前に「蕪提売・蕪手売」、筑前に「蕪代売」。

【タ】

多売・田売

竹良売 2 御野に「多加良売」。同国および豊前の「財売」と同名。

多吾美女 出雲の史料では「吾」は「グ」の仮名とするのが通説である。

手嶋売 御野に「多志麻売」。

手持女 「持」字は影印で確認しても明らかに牛偏で、読むとすれば「トコ」の二合仮名ということになるだろうが類例がない。「持」字とすれば、「手持売」の例となる。

立売 「タチ」の可能性もあるが、御野に「多都売・多津売」、筑前と豊前に「龍売」があるから、十二支による名と考えて「タツ」とする。男性名に「多都・龍・龍麻呂・立手・立麻呂」。

多間売・妙女 御野と豊前に同名がある。

玉女 2 「玉売」は各国に例があり、御野に「多麻売」。「玉」は古代の女性名に好んで使用された字で、男性名には「玉手」など少数しか例がない。

玉足売 2 同名が御野にある。

玉津売 4

玉身売 2

玉守売

玉依売

^{タ マ ル}多麻流売 ^{タ マ リ}御野「田麻利売」の類似名か。

^タ田特女・^チ手持売 2

【チ】

^{チカ}近女

^{チカツ}近津女

^{チツ}知豆女 ^チ御野「知売・^チ千売」の派生名か。

^{チニモ}知尔毛売

^{チモリ}知毛利女 ^{モリ}御野「母里売」、^{モリ}山背「毛理売」の派生名か。

【ツ】

^{ツカタ}束田女 「束」字は筑前に「手束売」。御野の男性名に「稲束」。

^{ツツラ}都々良売 蔓性植物「ツツラ」と同じだとすれば、長寿を願う名となる。

^{ツノ}角売 3 ^{ツノ}御野の男性名「津野麻呂・角麻呂」により「ツノ」とする。ただ、御野には「^{カト}加刀売」があり、「カド」の可能性も排除できない。男性名に「角麻呂」。

^{ツブラ}都夫良売 2 各国に例があり、御野に「^{ツブラ}都布良売」、不詳国に「^{ツブラ}豆布良売」。「ツブラ」は円状の物を言うから、健全な成長を願う名か。

^{ツムジ}丑牟自売 「丑」字の仮名としての使用は他に例を見ないものだが、『出雲国風土記』において神門郡の郷名「^{シツヂ}漆治」を「^{シツヂ}志丑治」と表すことから、「ツ」の仮名に相当すると考えられる。御野に「^{ツムジ}都牟児売・^{ツムジ}都牟自売・^{ツムジ}都牟志売」がある。

【テ】

^テ提女 他に例がない。脱字があるか。

【ト】

^ト刀女 豊前に「刀売」がある。

^{トイ}等伊売・^{トイ}止伊売 2 二拍目の「イ」は異例。『出雲国風土記』にも郡名の「^{オウ}意字」、大原郡の郷名「^{ヒイ}斐伊」などがあり、固有名詞による例外であろう。

^{トコ}得売 2・^{トコ}床売 2 「得売」は下総・山背にも。御野に「^{トコ}止己売」、下総・豊前に「^{トコ}徳売」がある。「得・徳」は「^{トコ}とこ」の二合仮名である。男性名に同名の異表記と思われる「^{トコ}得麻呂・^{トコ}床麻呂・^{トコ}常麻呂」があるから、「^{トコ}とこ」は「^{トコ}常」の意か。

^{トコジ}得自女・^{トコジ}得尔売 3 「尔」は通常「ニ」の仮名として用いられ、本史料でも同様だが、「得尔売」と「得自売」を同名と考え、「ジ」と読む。なお、鈴木

喬氏は『出雲国風土記』大原郡において、地名「得潮」が「海潮」に改められた例があることから、「得」が「ウ」の訓仮名で「得尔売」を「ウニ売」と読む可能性がある」と指摘するが、「得潮」の「得」は仮名としての用法ではない。

^{とこみ}
床身売

^{とシ}
歳売 2 御野に「止^{とシ}売」。「歳売」は山背・豊前に見える。御野の「止^{とセ}世売」からすると「とセ」の可能性もある。男性名に「歳尾」。

^{トジ}
刀自売 2 最も多い女性名の一つで、各国に例がある。

^{トモ}
伴売・友売 他国の男性名に「伴足・友足」「伴麻呂・友麻呂」があるが、女性名では次条を除いて例がない。

^{トモタリ}
友足女

^{とよ}
登与女・豊売 6 御野・筑前に「止^{とよ}与売」。「豊売」は各国に多い。男性名に「豊国・豊嶋・豊前」。

^{トラ}
刀良売 4 各国に例が多い。十二支による名である。男性名にも「刀良」は多い。

^{トリ}
鳥売 6・把^{トリ}売 各国に例が多い。これも十二支による名である。男性名に「鳥・鳥麻呂」。

【ナ】

^{ナキ}
奈枳売・鳴売

^{ナグヤ}
奈具夜売・奈吾夜売 3・奈久矢女 「奈吾夜売」は筑前にもある。「吾」は一般には「ゴ」の仮名だが、通説では「グ」と読むとされる。「ナゴヤ」と読んで別名とすべきかもしれない。

^{ナツ}
奈豆売

^{ナツミ}
名積売

^{ナホ}
奈保売・猶売 男性名に「奈保」。

^{ナニモ}
難毛売 2 同名が山背に、御野に「奈尔毛売」、下総に「奈尔母売」。

^{ナラ}
奈良売 2・檣^{ナラ}売 「奈良売」は筑前にある。

^{ナラヒ}
奈良比売 「ナラビ」と読むか。

【ニ】

^{ニキテ}
尔支豆売 2 「ニキ」は「和・柔」の意で「アラ」に対する語と言われ、名詞「ニキテ」は幣や布のことである。

^{ニハツ}
庭津売 御野にある「庭売」の類名か。男性名に「庭足」。

【ネ】

祢都売・祢津売 筑前に「泥豆売」、御野に「根都売」がある。これも十二支による名である。他国に「尼売・泥売・根売」など、男性名に「祢麻呂」。

他国には「尼麻呂・泥麻呂・根麻呂」があり、豊前に「鼠麻呂」がある。
祢奈売 2 前条の類名か。

【ノ】

能登志女 「のどシ」と読んで、後世の「ノドカ（長閑）」の語幹「のど」と同じと見る。男性名に「乃止志」。

【ハ】

波古女 下総に同名がある。

織女 「オリ売」とも読みうるが、豊前の「波太売」による。

【ヒ】

孫女 御野に同名および「比古売」。男性名で豊前に「比古」、山背に「孫麻呂」。「マゴ」の確例は上代にはない。

比佐豆女・久津売 7 筑前に「比佐豆売」。「久津売」の「久」は通常「ク」を表す音仮名だが、本史料の「ツ」表記では直前が音仮名であれば「豆」、訓仮名・借訓の場合は「津」を用いる傾向が認められる。よって、「久」を訓読して「ヒサ」と読む。

日更売 「更」字を用いる人名は類例がない。

日嶋女

羊女 同名は各国にあり、御野に「比都自売・羊売」。十二支に基づく名である。男性名に「比都自・羊」。

日女足女

比女豆女 下総に「比女都女」。豊前の「姫売」の派生名か。

比毛女・紐売

紐津売

比呂売・広売 6 「広売」は各国に多い。男性名に「比呂・広・広麻呂」。

広田売 同名は各国にある。

広足女 御野に「広足売」。男性名に「広足」。

広津売 御野に同名および「広都売」。

広見売

【フ】

他国には「布久止売・布施売・布与売・夫良女」などがある。

【へ】

例が稀だが、他国の女性名に「部屋売」、男性名に「閑志」がある。

【ホ】

^ホ富売 3 同名が御野・山背・山背にある。「穂」の意か。

^ホ細売 3 同名が御野に、下総に^ホ富曾売がある。男性名に「富曾」。

^ホ富足女

【マ】

^マ麻加太利売

^マ牧売 同名は各国にある。

^マ当女 3 「当売」が御野・因幡に、「^マ麻佐売」が山背・奈良にある。下総の「真桜売」も同名か。御野に「小当売」。

^マ当津売 2 御野の「当佐都売」は同名か。

^マ真籬女・^マ真衣女 御野に「^マ真衣売」。「真麻」の意だとすれば^{あざ}麻のことである。

^マ麻丑良売 「丑」字については「ツムジ売」条を参照。男性名に「^マ麻丑良」。

^マ真刀自女 各国に同名があり、下総・御野に「^マ麻刀自売」。

^マ真名売 御野に「^マ麻奈売」。

^マ真虫売 同名が各国にある。蝮の意だとすれば呪術的な名か。

【ミ】

^ミ味売 5・^ミ身女 2 同名は各国にある。十二支による名と思われる。男性名に「味麻呂」。「味乎・味提・身手」などもある。

^ミ道売 2 不詳国に「^ミ美知売」。男性名に「道麻呂」。

^ミ味豆売 3・^ミ身津売 御野に「^ミ弥都売・^ミ巳都売」、筑前に「^ミ未豆売・^ミ身豆売」。御野の男性名に「^ミ身津・^ミ身都」がある。

^ミ美刀女 ある新聞の夕刊漫画に「ミト」という幼女が登場する。筆者は珍しく思ったのだが、意外に古くからの名である。

^ミ美孛利売 他国には例がない。古代語のミドリは色名ではなく新芽・若芽を意味する。戸籍では3歳以下の男女を「緑兒・緑女」と称する。

^ミ美奈売 3 同名が山背に、御野に「^ミ弥奈売」がある。

^ミ御毛売 他国に例がない。御野に「^ミ弥禰売」、同国および豊前に「^ミ御禰志売」があるが、「禰」が甲類ケ、「け(毛)」は乙類だから「ミケ」とは読まない。

^ミ宮売 同名は各国に多い。御野に「^ミ弥移売・^ミ弥屋売」。男性名に「^ミ宮麻呂・宮

手」。

【ム】

^{ムシ}虫売 2 各国に例が多い。男性名に「虫・虫麻呂」。

^{ムシ}^シ^ナ牟志奈女 御野に同名および「牟志名売」、豊前に「牟志那売」。御野の「虫奈売」、各国の「虫名売」も同名。近江に多い「虫玉売」を考慮すると、「虫」は単なる昆虫類ではなく「蚕」の意か。

^ム^ツ^ミ牟都美売

【メ】

^メ^ゴ売胡売 2 ・ ^メ^ゴ女古女 ・ ^メ^ゴ売子売 ・ ^メ^ゴ女子女

^メ^タ米太売 2

^メ^タ売足売 ・ ^メ^タ女足女 2

^メ^ツ売豆売 3 ・ ^メ^ツ女津売 5 「売・女」はメ甲類の仮名だから、次条とは別名としておく。筑前に「畔豆売」がある。

^メ^ツ米豆売 5 ・ ^メ^ツ目津女 「米」はメ乙類の仮名。前条とは別名か。筑前に同名がある。

^メ^ト女刀自女 「刀自」自体が女性を表すから、「女」を冠するのは異様に思える。他国に例はない。

^メ^ヒ売斐売 ・ ^メ^ヒ姪売 奈良に「売斐売」、近江・豊前・不詳国に「姪売」。この名と対照的な「甥」が御野の男性名にあり、出雲「^オ^ヒ意斐」、御野「^オ^ヒ意比」も同名と思われる。ただ、女性名にも御野に「^オ^ヒ意比売」、山背に「^オ^ヒ意斐売」がある。戸籍や計帳類での「甥・姪」の用法については、桑原祐子氏に論がある(74p以下)。必ずしも性別とは関わらない。

^メ^ラ売良売

【モ】

^モ毛女 ・ ^モ母売 他国の例はない。

^モ^ロ毛呂女 2 ・ ^モ^ロ諸売 6 豊前の「^モ^ロ母呂売」1例を除き、他国の例はない。

^モ^ロ^テ諸手女

【ヤ】

^ヤ^カ^ツ宅津売

^ヤ^カ^ナ家成売 2 「家」字は「宅」と通用する。男性名に「家麻呂」。

^ヤ^シ^マ八嶋女 御野に「八嶋売」がある。

^ヤ^ス安女 御野に「^ヤ^ス屋須売」。「安」字は一般には仮名アとして用いるから「ア売」

と読む可能性がある。因幡の「吾女」が該当するかもしれない。ただ、御野の男性名に「安」があり、並んで「安売」もある。男性名「安麻呂」も「ヤス麻呂」と読むことから、この「安」は訓「ヤス」と読むべき字と考える。

ヤツ 夜津売

ヤエ
夜恵売 豊前に同名。男性名に「夜恵」、筑前に「夜恵麻呂」がある。

【ユ】

他国には「結売」があるが、本史料には見えない。男性名に「結手」。

【エ】

えみ
兄身女 他国に例はないが、下総に「兄売」、御野に「兄屋売」。

【ヨ】

よし
吉売 「吉」はキ甲類またヤ行エの仮名だから「キ」「え」とも考えられる。ただ、御野に「与志売」があり、同国に「善売」があることから、「ヨシ」の読みとする。男性名「吉事・吉嶋」の読みも問題になるか。

よそ
与曾布売 下総・豊前に同名、筑前に「与曾甫売」。「装う」の意か。

よど
与杵女・与止売 筑前に「与止売」。「淀む」の「よど」と音結合は同じ。

よど 与止志売

よど 与杵美売

より
与理売・依売 3 「与理売」は下総・豊前にあり、「与利売」が筑前にある。「依売」は御野・山背に見える。男性名に「依間・依馬・依人」。

よろ
与呂志女 上代語の形容詞で、未発達連体形に代わって終止形が連体形の機能を担っていたとして神代記の「佐加志女・久波志女」の例が有名だが、戸籍類では必ずしも稀ではない。御野加毛郡半布里の戸籍(⑤28p)では、一戸の女性名に「久波志売(妙)」「宇礼志売(嬉)」「伊豆志売(厳?)」がある。また、山背にも「伊布賀志売・伊夜志売・志祁志売・奈豆加志売」など。豊前の男性名に「冝」。

よろ
与呂豆売 山背に「万売」。

ヨツ
弱津売 「シこ売」と同様の命名法による名か。

【レ】

レ
礼売 古代語ではラ行音が語頭に立つことはないというのが定説だが、人名の場合には例外になるのか。豊後の女性名「流美売」が唯一の類例。

レテ
礼手女 前条参照。

【ワ】

若売 3 同名は各国に多い。御野に「和加売」。

若子売

若津売 筑前に同名。

我妹売 2 「アギモ」とも読めるが、豊前「和岐毛売」、不詳国「和伎毛売」による。

和和良売 2 御野に「和々良売」。『万葉集』1618の「秋萩の末和々良葉尔置ける白露」の「和々良葉」には諸説あるが、本史料のように畳字符号を用いない例があることから、「ワワラ」の読みの存在が裏づけられる。

【キ】

猪女 十二支による名だが、女性名で単独の「猪」を用いた例はない。「猪手売」は各国にあり、御野に「猪奈売・猪名売」。男性名に「為麻呂・猪手」。

井手女 同名が御野にある。他国の男性名に「井代・井手」。

【エ】

他国には「恵師売・恵怒売・恵弥売・恵良売」などがある。男性名に「恵志」。

【ヲ】

小売 2 各国に同名および「乎売」、豊前に「尾売」。接頭語的に用いられる「子」が派生的な意味であるのに対して、「小」は単に小さいことを意味する。出雲では男性名に多く、「小鳥・小村・小伝・小国・小船・小虫・小友・小測・小根・小縄・小君・小墨・小嶋」などがある。

長売 御野・山背に同名があり、男性名「長」が下総にある。

悪多売 「悪」が音仮名かどうかは疑問だが、今仮に「ヲ」と読む。筑前に「乎太売」、御野に「小多売・小田売」がある。「多売・田売」に対する名か。

少提(売) 豊前に「乎提売」、御野に「乎手売」。「提売」に対する「小提売」か。男性名の「少瀬・少羽」も「少」が用いられている。

袁味女・袁身女・小身売 2 豊前に「小身売」。これも「身売」に対する名である。

袁美奈売 2 「ヲミナ」は「女」でもあるが、名としては「美奈売」に対する「小美奈売」と思われる。

★存疑例

御事女 「ミこと」か。「事」字を含む女性名は他に「事无売」(備中)「事比売」(御野)がある。後者は、男性名に「許等比」(遠江・豊前)「事日」(御野)が

あるから「ことヒ売」と思われる。

金身女 「カナミ」か。御野に「加奈売^{カナ}」および「加尼売^{カネ}」があり、下総に「金売・小金売」がある。

桓売 筑前に同名。「桓」は「たかつき・ます」と訓じられる字で、不詳国に「都伎売^{ツキ}」、御野・奈良に「麻須売^{マス}」、御野に「真須売^{マス}」。

創売 「ツクリ」か。

送売 「オクリ」か。

縁売 「ヨリ」または「フチ」か。前者は「飯依売^{イヒヨリ}」で述べた通りで、後者は御野に「布知売^{フチ}」がある。男性名にある「法縁・智縁」は仏教との関わりを思わせる。出雲の「縁麻呂」がある。

瓔売 「タマ」か。出雲を初め一般には「玉売」と表記する。御野に「多麻売^{タマ}」、近江に「多真売^{タマ}」がある。男性名に「瓔」。

2. 女性名の用字について

最初に女性名に使用されている万葉仮名の字母表を示しておく。上代特殊仮名遣いの甲類・乙類は上下に分けて示し、上段が甲類、下段が乙類である。濁音仮名は特には示さない。

ア	阿	イ	伊	ウ	宇	エ		オ	意
カ	加臯香	キ	支伎枳	ク	久吾具	ケ	氣	コ	古故枯胡子木去
サ	佐	シ	志自尔	ス	須	セ	世	ソ	襦衣曾
タ	太多田手	チ	知	ツ	豆丑都津	テ	弓提手	ト	刀等登杼止
ナ	奈名	ニ	尔	ヌ	奴	ネ	祢	ノ	能乃
ハ	波	ヒ	比日斐	フ	布夫	ヘ	閑	ホ	保富
マ	麻目真間	ミ	美見御味身	ム	牟	メ	売女米目	モ	毛母
ヤ	也夜矢			ユ	由	エ	兄	ヨ	与
ラ	良	リ	利理	ル	流	レ	礼	ロ	呂
ワ	和	ヰ	井			エ	恵	ヲ	袁惡少少

範囲を緩くとったからだろうか、鈴木喬氏が地名・人名・社名等の全てを対象に作成されたという字母表(19p)とかなりの相違がある。鈴木氏の表には、タ「田・手」、ナ「名」、ノ「能」、ヒ「日」、フ「夫」、マ「目・真・間」、ミ「見・御/味・身」、メ「女/目」、モ「母」、ヤ「也・矢」、ヤ行エ「兄」、キ「井」、ヲ「悪・小・少」などが見えず、その理由がよく分からないのである。

特に問題があるのはミ乙類の仮名「味・身」である。「味」9例、「身」15例あるにもかかわらず、表中に見えないのはなぜだろうか。一覧にも記したように、「味売・身売」「味豆売・身津売」などが十二支の「巳」(乙類)に由来する名であることは疑えないから、これらを仮名と認めない理由はないはずである。

また、モは「毛」だけだが、次の名の「母売」をどう読んで「毛女」と違うとと考えた結果なのかが分からない。

戸主日置部龍口若倭部母売 年五十四 (②154p 2行)

戸主日置部首庸麻呂口日置部首毛女 年八十 (②130p19行)

序でにいえば、鈴木氏の『出雲国風土記』の字母表(同上)にも「母」は見えない。地名をも含むはずだが意宇郡「母理郷」(元「文理」)の「母」は採られていない。

さらに、次のヤ「也」がない。

戸主伊福部佐都由美口伊福部伊也女 年五十四 (②137p12行)

同じく、「矢」が採られない理由も分からない。

同口語部奈久矢女 年六十 (②127p 8行)

「奈具夜売」と同名だから、音仮名「夜」に対する訓仮名「矢」のはずである。

その他、例えば「豆」を濁音仮名として区別しているが、「阿豆売・知豆売・奈豆売・比佐豆売・比女豆女・味豆売・売豆売・米豆売」などの「豆」を全て「ヅ」と読むという解釈結果なのかが分からない。

不可解な字母表によって表記の位相を論じようとしても、妥当な結論を得ることは難しそうである。

用字・表記の問題であれば、むしろ次のような例の方が問題だと思われる。

女性名一覧の末に存疑例を列挙したが、その内のいくつかは、同じ断簡において近接して現れるのである。神門郡伊秩郷坂本里の寡の記事である。

戸主語部牛麻呂口同部椀売 年六十三

戸主語部乃止志口同部創売 年六十一

戸主語部麻呂口同部都夫良売 年五十七

戸主語部刀良口同部送売 年四十七

同部語部佐流売 年七十九

同口語部把売 年五十

戸主舎人部立麻呂口凡治部阿豆売 年五十五

戸主舎人中麻呂口同部佐流売 年六十九

戸主印色部佐流口凡治部石津売 年六十二 (②151~152p)

同じ断簡には「縁麻呂」(多伎郷国村里)「縁売」(狭結駅)も見いだせる。一覧では「把」を「トリ」と読んだが確實とは言えないから、本史料で読みが確定できない表記はこの断簡に集まっていることになる。

まずは史料内に存するこうした断簡ごとの用字の偏りを明らかにして、始めて史料全体の性格づけが可能になるのであろう。

3. 女性名末尾の「売・女」について

桑原祐子氏は本史料の断簡ごとに女性名構成要素の「売・女」の比率を調べて、筆録者の個人差があることを明らかにされたが、前節で指摘した事実は、個人差が形式的表記にとどまらない部分にまで及ぶことを示唆する。

桑原氏が史料を戸籍・計帳・その他に分けた綿密な調査に基づき、女性名末尾の「-メ」を表す仮名「売・女」の使い分けを明らかにされた点は敬服に値する。ただ、それが様式論(書式論)の段階にとどまって表記論には至っていないのではないかの感を抱く。

一例を挙げると、戸籍では「売(賣)」専用でありながら、御野国では例外的に「女」を使用した記事がある。桑原氏は論の注(76p)にその全例を示しておきながら、

右の例の記載位置について、とくにすべてに共通する条件も見当たらない。また、「-メ」を除く個人名の部分の表記についても明確な特色は見当たらない。(77p)

と述べるにとどまっている。

この前段については、実は、影印によって直ちに諒解できる共通の特色が存する。

御野国の戸籍では、一面を上中下三段に分け、その一段中に記事を収める書式である。御野型戸籍では一戸の人物を男女別に記載するため、戸内の家族関係が紛れやすい。係累を明らかにするためには、女性名の前に「戸主妻」「犬

麻呂妻」「戸主同党妹」などと示し、氏姓および名を記すことになる。その女性名も「志祁多女・阿多真志女・阿多摩志女・多知麻女」などと必ずしも短くない。例外的に「女」を用いた13例は、一例を除きすべてこうした類の記事であり、一段に収めるには文字数が多すぎるのである。

影印によって見れば明らかだと思うが（例えば、⑤26p 1行目の中下段）、圧縮した書記法によって枠内に収めようとしているものの、それが無理なとき、やむを得ず字画の多い「売」を避けて「女」を用いたために例外となったのである。

ただ一例それに合致しない「次加多弥女」（⑤36p15行中段）という短い記事がある。確認すると、いったん記事を書いた後に、書き落とした「女」字を「弥」の下の字間に小さく補入したらしいことが分かる。つまり、事情は他の例外と通じる。

桑原氏はこうした例外を説明できなかったにもかかわらず、戸籍・計帳で「女」は性別の明示として機能していたため、代わって女性名の構成要素「ーメ」の表記には「売」が専用されたと結論づけるけれども、この結論は戸籍・計帳の書式論あるいは様式論としては妥当だとしても、例外としての女性名末尾の「女」が除外されたままでは、まだ表記論とは言えないのではないか。

もう一つ、桑原氏の論にもかかわらず、御野国戸籍には少数ながら「女・売」を一般の仮名として使用した例がある。

志女移売 (⑤17p 7行上)	志売屋売 (⑤21p 5行中)	加毛郡半布里
志売夜売 (⑤56p15行上)	比売知売 (②19p 9行上)	本簀郡栗栖太里
女知売 (②6p 2行上)		味蜂間郡春部里

女性名末尾に「売」を用いて例外のない下総国倉麻郡意布郷戸籍にも次の例がある。

売乃古売 (①279p)

表記論であれば、戸籍における機能文字としての「女・売」と、これらの例外的な仮名文字としての「女・売」の双方に配慮して立論する必要がある。御野国の「女知売」に関して言えば、同国には乙類の仮名を用いた「目知売」6例、「米知売」1例があるのだが、これらとの関係も明らかにしてほしい所である。

出雲国の史料に話を戻すと、出雲郡神戸郷某里の寡には前述した神門郡のように、「丑・悪・少」といった本史料では特殊な用字に属する表記が集まっている（「少」は同郡の漆治郷にも）。その中の記事の一部に

同口若倭部売豆売 年六十五

戸主神奴部床麻呂口鳥取部米豆売 年六十四

戸主神奴部歳尾口鳥取部女津女 年六十六 (②140p)

と、類似の名が三つ続く。はたしてこれが意図的な配列なのかどうか。一覽では分かりにくい、[「メツメ」]の表記は次の五種がある。

(甲類) 売豆売 女津女 女津売

(乙類) 米豆売 目津女

ここから見て取れるのは、「女・売」についてではなく、「ツ」を表す仮名「豆・津」が、直前の仮名が音仮名のときは「豆」、訓仮名などのときは「津」であるように見えることである。勿論例外もあって、「豆」の「比女豆女」がそうであり、「津」でも最初は「久津売」を「クツ売」と読んで例外と考えたが、「ヒサツ売」と読めば例外ではなくなることに気づき「比佐豆女」と同名とすることができた。

「女・売」の使い分けの問題が、こうした他の問題へ有効に働くだけの射程をもったとき、始めて表記論としての成り立つのではないかと思う。

4. 最後に

「正倉院文書」の史料を最近になって初めて読む機会があり、古代出雲国の女性名が数多く並ぶ様に興味を引かれた。「櫛名売」の名は素盞烏尊の八岐大蛇退治の神話に登場する姫を思わせ、「奈具夜売」を見れば『竹取物語』の「かぐや姫」もあながち架空の人名と思われず、「美杼利売」に至って『たけくらべ』の少女の名「美登利」が伝統的な名であったことを再認識させられた。下総国の戸籍に「手古売」があるのは『万葉集』の「真間の手児名」の郷であればこそと感じた次第である。

しかし、種々調べていると、貴重な史料には違いないが、「正倉院文書」の大部分は断簡であり、偶然の残存と言わざるをえない面を持っている。従って、統計的処理によって確実な議論を進めることは控えめにしなければならない。本稿が用いた「出雲国大税賑給歴名帳」にしても、出雲郡と神門郡の一部が伝わるだけだから、慎重に扱うべきことは勿論である。

一部指摘したように、筆録者によって特異な表記を用いる傾向が認められたり、通常は仮名として使用される文字を訓読して用いる事実などは、その意味する所をさらに追究する必要がある。

筆者には知識の乏しい上代語であるから、さぞかし誤りが多く含まれるのではないかと恐れる。試論として、次の段階での確かな解説の一助となれば幸いである。